

発行所(郵便番号100)  
東京都千代田区丸の内2-4-1  
丸の内ビルディング781号室  
社団法人スウェーデン社会研究所  
Tel (212) 4007-1447  
編集責任者 高須裕三  
印刷所 関東図書株式会社  
定価106円(年間購読料千円)  
1972年9月25日発行  
第4巻 第3号  
(毎月1回1日発行)  
昭和44年2月23日第3種郵便物認可

# スウェーデン社会研究月報

Bulletin Vol. 4 No. 8

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning  
(The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)  
Marunouchi-Bldg., No. 781, Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan

## スウェーデンの地方に見る老人福祉の現況

Present Situation of Swedish Communities' Welfare for Old People

戸川佳和

Yoshikazu Togawa



(マルメ市の老人ホームの談話室)

スウェーデンにおける老人福祉を中心とする福祉行政の実情を把握するため、昨年9月から11月まで2か月にわたりスウェーデン各地で調査研究を行なった。スウェーデンでは老人福祉行政は、わが国の市町村に該当するコミューン(Kommun)の所管となっている。コミューンには首都ストックホルムのような大都市から人口二万程度の農村までその規模は様々であるが、いずれのコミューンにおいても立派な老人ホームを設置している。スウェーデン西岸の都市イエテボリーの郊外にあるパーティレ(Partille)・コミューンは、人口僅か21,000人の農村であるが、老人ホームを3カ所も設置している。設備の点においてもストックホルムで見学した老人ホームより遙に優れていた。また、在宅対策についても家庭奉仕員制度、給食サービス等の諸制度が地方の各コミューンに深く浸透している。

### 1. クローズド・ケア (Closed Care)

#### (1) 地域社会に融合した老人ホーム

ストックホルムやイエテボリー(第2の都市)で訪問した老人ホームは、市街地の閑静な場所に設置されており、地域社会との交流に大きな役割を果たしている。ストックホルム郊外の美しい運河に囲まれたナッカ(Nacka)・コミューンのタリッドゴールデン(Tallidgården)老人ホームは、身体的条件、即ち一人では歩行が困難な者と自由に歩行できる者を分け、それぞれ専用の棟に收容しているが、後者の收容棟に居住している老人のなかに、その老人ホームの近くに自分の住居をもつ老人がいた。彼は子ども達が独立し別居生活を送っているのに、自宅にいても生活に変化がないという理由で老人ホームに入居しており、自宅には週に一度帰るといつていた。この事実から老人ホームと近隣の老人との密接な関係を知ることができる。また、食堂を近隣の居住者に開放することによって、老人ホームと地域社会の融合を進めようとする施策が各地で進められている。イエテボリーのホーグスボトルプス(Högsbotorps Hemmet)老人ホームには、食堂が二階と一階にあり、一階の食堂は施設外の者も利用できることになっている。

老人と幼児の接触を図ろうとする試みもなされている。鉄鉱石の産地として、また北極圏の都市として有名なキルナ(Kiruna)・コミューンでは老人ホームの隣りに幼稚園を設置し、老人の生

活に変化と明るさをもたらすよう配慮している。この施設建設には老人ホームが老人だけで構成される社会であるため偏った面を是正しようという考えがみられる。

以上のように老人ホームを地域社会の構成単位とすることによって開放的なものにしようとする努力がなされており、その最先端に行くのは、地域老人のセンター的機能を果している マルメー (Malmö) ・コミュニンの老人センターの構想である。老人センターの教養、娯楽等の各種設備は、当センターに併設されている年金受給者住宅や老人ホームの居住者だけでなく、近隣の老人の利用にも供されている。

## (2) 精神的に安定した入居者の生活

老人ホームの近代化にとって居室の個室化は極めて重要な要素である。他人と同居してはプライバシーの保持はありえない。人間は社会的動物であると同時に、孤独を愛する動物であることも忘れてはならない。スウェーデンでは何処のコミュニンでも単身者は個室を、また夫婦は2部屋つきの居室を与えられており、トイレも各居室についている。老人ホームというよりむしろ介護人つき住宅といったほうがよいであろう。パーティレ・コミュニンで最も古いヨンセレド (Jonsered) ・老人ホームは、1900年に建設された定員20人の小規模施設で廊下は狭いが、単身者の居室は個室であった。

居室のなかには申し合わせたように壁、または家具の上に若かりし頃の自分や家庭の写真が飾ってあり、明るい雰囲気にも包まれていた。1931年に建設されたオステボ (Åstebo) 老人ホームの居室には、18世紀や19世紀の由緒ある家具が置いてあったり、百年前のイエテボリーの風景を描いた絵が壁に掛けてあり、入居者の昔の生活の一端を垣間見ることができた。家具がない者には、コミュニンが一定の範囲内で家具を貸与してくれることになっている。また、居住者が他人の居室に遊びに行っている姿を見かけたこともある。スウェーデンの老人ホーム居住者の生活形態は、わが国のアパート生活者のそれに近いといえよう。従って入所希望者が多く、ストックホルムでは80歳以上でないとは入所できない状態であるし、イエテボリーでは約2,200人の入所待機者がいた。今世紀前半の老人ホームには暗いイメージがあったが、現

在では完全に払拭され、スウェーデン国民に大きな魅力をもたれている。

わが国の老人ホームは、雑居性と一人当たり居室面積が小さいことから同居者間の人間関係の処理が困難な場合が多い。さらに、家具の持込みや飾りつけも殆ど不可能で、「安住の場」としての魅力に乏しい。将来の改善にあたってスウェーデンに学ばなければならない点が極めて多い。

## (3) 生きがいを与える完備した設備

スウェーデンの老人ホームは、居室が個室であるため、娯楽室、サンルーム等が居住者相互の社交の場として必要となる。前述したタリッドゴルドン老人ホームにはすばらしい娯楽室が、またパーティレ・コミュニンの近代的施設であるクッレゴルドン (Kullegården) 老人ホームには日当りのよい場所にサンルームがあり、それぞれ室内のスペースに余裕をもたせ、採光にも充分配慮してあった。

教養生活の中心的存在となる図書室は、各地の老人ホームに設置してあり、図書はよく整理されていた。マルメー図書館福祉部に勤務している女性チューリン (Kjestin=Thulin) さんの説明によると、同図書館はマルメー・コミュニンの老人ホームをはじめとして90カ所の福祉施設に定期的に図書を配達しているとのことであった。

趣味は老人の生きがいに結びつくという意味で施設対策上重要な位置を占めている。救貧院時代の古い建物を使用している老人ホームは別として、訪問した殆どの老人ホームには各種機械や器具を備えた趣味の作業室があった。作業としては織物を作ったり、手芸をしたりする者が多く、作業指導員が指導してくれる。前述したクッレゴルドン老人ホームでは絨毯や壁にかける大きな織物を作っていた。製品のデザインにはスウェーデンの伝統的模様がみられた。製品は市販品に見劣りしないほど精巧に作られている。

入浴設備については、腰部や足部が弱い老人を職員一人が入浴させることができる特殊浴槽を使用していた。この浴槽の使用により職員の労力が著しく軽減されている。

ストックホルムから郊外電車で約20分の距離にあるイエルフファツラ (Jarfalla) ・コミュニンのタルボホブ (Tallbohov) 老人ホームにはサウナ風呂があり、入居者に非常に喜ばれているという

ことだった。

## 2. オープン・ケア (Open Care)

オープン・ケアの中心となるのは家庭奉仕員制度である。老人や身体障害者を対象とする家庭奉仕者はヘムサマリット (Hemsamarit) と呼ばれ、対象者の家庭に派遣されて家事、買物等を行なう。ヘムサマリットの報酬は時給給 (一時間約600円) で、対象者は所得に応じて支払う。所得が一定額以下であれば勿論無料である。マルメーで訪問した77歳の独り暮らし老人マーチャム (Karin = Marcham) 氏は、元外国航路の船長で、現在かなりの年金収入があり、ヘムサマリットに報酬を支払っていた。マルメーでは、ヘムボードスセントラル (Hemvårdscentral) で独り暮らし老人や身体障害者に対する援護を集中的に行なっている。即ち、自分で起床や就寝が困難な者についてはシティ・ナースを派遣してこれを行ない、家

事、買物等はヘムサマリットに行なわせている。

一般にコミュニオンは、老人ホームの建設には多額の予算が必要なので、在宅対策をより一層推進しようとしている。給食サービスも主要な在宅対策の一つである。配達されるのは、冷凍食品なので、暖めなければ食べられない。従って、手先が不自由な者についてはヘムサマリットが食べ易い状態にしてくれる。

## む す び

以上スウェーデンの地方における老人福祉について簡単に述べてきたが、この高水準の福祉制度を支えているのは、勿論世界一とまでいわれる税金である。しかし、「草の根の福祉」とでもいえる国民の福祉に対する高い意識と正しい理解が精神的基盤をなしていることを忘れてはならないであろう。

(神奈川県民生部民生総務室主事)

# 福祉国家スウェーデン見聞記

—対話の中からその実像にせまってみれば—

Personal Experiences in Welfare State Sweden

—One Case to Approach Her Reality Through Dialogue—

浅 野 仁

Jin Asano

今年の一、三週間にわたり社会福祉の先進国であるスウェーデンの実情を見聞する機会を得た。もとより、三週間という短期間ではその一端を把握することすら至極難しい。

以下の拙文は一介の旅行者の見たまま、感じたままを誤解を顧みず綴ったものである。

## 老人福祉サービスについて

福祉国家スウェーデンの老人福祉サービスは、十分な所得保障 (老令年金)、住宅保障そして医療保障の上に成り立っている。

老人福祉サービスが十分な効果をあげるためには、社会政策、社会保障の充実が先決であることは自明の理である。我が国の老人福祉が決定的にその制度を欠陥させているから、スウェーデンがそれを完備しつつあることに深い感銘を受けたものであった。

ウプサラ市を例にとりて、現状を紹介してみた

い。

サービスを①open care, ②half-open care, ③closed care に大別すれば①として、ホームサマリタン (ホームヘルプ)、給食サービス、足の治療 (foot care) 等がある。

イギリスの給食サービスが老人家庭に給食を配達しているのに対し、当地では、学校が老人のために給食サービスをしている。地域に住む老人が近くの学校の食堂まで昼食を食べに来るのである。私は一度小学生と老人と一緒に食事している場を見学したが、家にとじこもり勝ちな老人にとって、せめて昼食時でも外出し、沢山の人々と交わるのは非常によいことであると思った。面白いサービスだと思ったのは清掃車 (cleaning patrol) を常備していて、年二回各老人家庭を巡回して大掃除をするサービスである。不潔になり勝ちな単身老人の家庭にとって、効果のあるサービスといえよう。また、社会局と老人家庭を

緊急用の電話 (alarm centrum) で結び、老人が家庭内で事故を起こした場合、昼夜を問わず、社会局の職員が出向き、入院措置や善後策を早急に立てるサービスにも感心した。網の目のようにはりめぐらされたきめのこまかいサービスである。②の half-open care は老人のためのアパートに代表される。まだまだ、十分な数まで整備されていないようであるが、住環境が悪化している都市部では、住宅サービスは、独立して生計を営める老人にとって重要なサービスである。

③はいうまでもなく老人ホームである。ウプサラには15の老人ホームがあり、600余人の老人が利用している。利用者の一日の総経費は70kr~75kr (約5,000円)で、その内、年金受給者は30kr (約2,100円)を負担している。老人ホームには、身体が弱い、もはや家庭で自立して生活できない老人が利用しているの、四六時中介助を要することになり、病院とかかわらなくなってきている。我が国の老人ホームがともすれば「閉鎖した」ホームであるのに対して、当地では「開かれた」ホームにしようとする努力が見受けられた。老人ホームを総合施設にかえていこうとする方向もその一つの改善策である。

ウプサラ・コミュニンの説明があとまわしになってしまったが、人口13万人の内、65歳以上の老人が1万6千人で、約12.3%を占める。スウェーデンの他都市と比較して、老令人口は相対的に高いようであるが、きめのこまかい老人福祉サービスをこの目で確め、日本のそれは足もとにも及ばないと思った。

### スウェーデン国民の暮らしむき

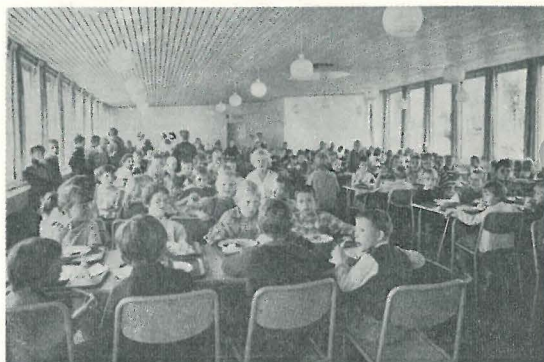
世界一所得の高い国という統計数字を頭にえがきながら、現実のスウェーデン国民の暮らしむきを確かめたい、というは私の別の関心事であった。

まず、二つの家庭の生計費を紹介してみよう。子供一人をもつ共稼ぎ夫婦の家計状況は、

|                    |                   |
|--------------------|-------------------|
| 収入 (一か月)           | 給与総額 (手取額)        |
| 夫 (高校の先生, 大卒後4年)   | 5,000kr (2,900kr) |
| 妻 (社会局勤務, 大卒後3.5年) | 4,000kr (2,300kr) |
| 児童手当               | 100kr             |
|                    | <u>5,300kr</u>    |
| 支出                 |                   |
| 住宅購入費返済金           | 1,200kr           |
| 食費                 | 800kr             |

|              |                |
|--------------|----------------|
| 光熱水費         | 500kr          |
| 自動車 (2台) 維持費 | 300kr          |
| 保育料          | 700kr          |
| 文化教養費        | 若干             |
|              | <u>3,300kr</u> |
| 貯金           | 2,000kr        |
|              | 5,000kr        |

一目して、我が国の共稼ぎ夫婦の収入に数段まさる富裕さである。夫の収入だけで十分生活できるのに、何故子供を保育所に預けてまで妻が働く



保育園の子供達。働く女性のためにゆきとどいた設備の保育園がいたるところにあります。

のか、と奇異に思った。私の疑問に彼女は答えて、一つは教育の機会均等によって、個々人の意志の選択が可能となり、それが婦人労働を容易にしていることであるらしい。また、近所でカラーテレビ、自動車、サマーハウス、ヨットを購入すれば、他人の所有している奢侈品に目を奪われ、それらを購入するために婦人が働きに出るといふことらしい。これはまさしく、ガルブレイスが指摘する「民間の欲望」というものは広告や社会的競争意識によって左右される「ということであろうか。次の例は老人アパートに住む一人暮らしの老人世帯の家計状況である。

|                 |                           |
|-----------------|---------------------------|
| 収入              |                           |
| 基本老令年金          | 596kr (約38,000円)          |
| 家賃補助            | 396kr (約25,000円)          |
| 亡夫の企業年金         | 202kr (約13,000円)          |
| 計               | <u>1,194kr (約76,000円)</u> |
| 支出              |                           |
| 家賃 (但し、含ガス・水道代) | 396kr (約25,000円)          |
| 食費              | 350kr (約24,000円)          |
| 電気代、電話代、タバコ代    | 75kr (約4,800円)            |
| その他雑費           | 373kr (約23,900円)          |
| 計               | <u>1,194kr (約76,000円)</u> |

単身者である彼女は子供のために財産を残す必要がないから、収入の全部を生活費として消費してしまう。部屋は一人で生活するには十分過ぎるほどの広さである。物質的には何一つ不自由ない生活といえよう。それでも話をしながら感じたことであるが、やはり一人住いのわびしさは否めない。物質だけでは解決し得ない心の問題が、生きがいの問題が別の側面として残されると感じた。

### 高福祉と高負担について

社会保障や社会福祉に要する国、地方自治体の経費は膨大なものである。行政の予算には限界があるから、当然その費用は国民の税金によってまかなわれる。

我が国の勤労者の税金も間接税を含めれば、所得の30%以上になるだろうが、スウェーデンではそれ以上であることに間違いない。

重税について、幾人かから意見を聴いてみた。卒直な感想を引用すれば、

「高い税金に対しては、国民は不満をもちます。しかし、私達は同時に不時の際の保障・サービスもしてほしい願っています。減税を望みながら、同時に社会福祉を充実してほしいというのは国民の勝手な注文であろう。よくわかっているけれども、それでも重税がかなわないというのが本音でしょう。」

「確かにスウェーデンの税金は重いし、ある人々にとっては重すぎる。しかし、収入（total income）は増加している。GNPの増加とともに、個人の収入も同時にふえることが必要である。今のスウェーデンのGNPと個人所得は横バイ状態を続けているが、GNPが将来上昇していくことが課題であろう。」

「税金は国税と地方税で、国税は累進課税、地方税は一定比率をもって課税される。その内訳は州税（County）、コミューン税、教会納付金に分類される。地方税額は各地方自治体の必要経費の多寡によって決められるから、5krの地方もあれば、20krの所もある。」

どうも高負担に対する一般の感じは、高すぎるということらしい。国民は理屈の上ではよくわかっているけれども、感情的に割りきれないというのが実情のようである。

### 福祉国家に思うこと

一つの社会制度である福祉国家について思うこと。スウェーデンを例にとりて考えてみても、自分の目で確かめる前と確かめた後とは随分異なる。百聞は一見に如かずの効験あらたかということであろうか。

まず、福祉国家という語感から私が今迄抱いていた「人間社会の天国」観は一掃された。

社会が近代化され、福祉制度が定着しつつあるこの時点で、両者の矛盾が重層して、種々の深刻な社会問題が起っているのである。

私が耳にした当地の社会問題として、

1. アルコール中毒患者が多数存在すること
2. 多数の自殺者
3. 離婚ケースの増加
4. 残虐な犯罪の増加
5. 失業者が多数存在すること。
6. 人間関係が稀薄化していること。

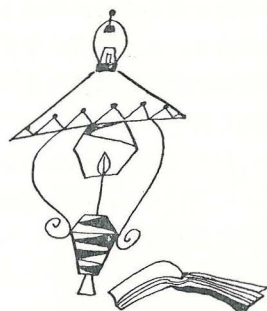
どれ一つをとっても、我が国のそれはより深刻であるかも知れない。

いうまでもないことであろうが、福祉国家スウェーデンはその非を認め、改良に努力している。10年後のスウェーデンは現在の福祉国家の様相を変容して、国民のより住みやすい社会になっているような感じがする。

現在のスウェーデンが一つの完成した国家形態だと発想したところに私の大きな誤謬があった。

上記の「教訓」を得た今回のスウェーデン訪問は私にとってなにもものにも代えがたいものであった。

（老人ホーム京都大覚寺前健光園）



# ガブリエラ・ガデリウスとわたし

Gabriella Gaderius and Myself

評議員 小野寺 百合子

Yuriko Onodera



クヌート・ガデリウスについては、本誌 Vol. 4, No. 4 で述べたが、わたくしがスウェーデンへ行ったとき、彼はすでにこの世にいなかった。しかし、その夫人ガブリエラは1941年以来、68年に彼女の死去するまで、国境を越えた親友の一人であった。

ガブリエラとの交際のうちで、最も感激的だったのは、昭和20年8月15日、日本敗戦の日、チョコレート一箱持ってわたくしを訪ねて来てくれた時のことである。ストックホルムのあの住居で、手を握り合ってさんさん泣いた揚句、彼女はきつと態度を改め、「日本は必ずまた立ち直りますとも」といった。この励ましの言葉を、わたくしははその後の若しかった最中も、少しずつ楽になり出した途中も、また今日も思い出す。異国である日を迎えたわたくしに、誰があれだけの慰めと励ましをしてくれたらどうか！

ガデリウス商会は、戦時下でも踏み止まり、遂に頑張り通したが、終戦後は既に成人した息子たちが次々と来日し、父の遺業の再建に取りかかった。息子たちは何年目かごとにお母さんのガブリエラを日本に招待し、日本滞在の楽しみをさせて上げた。その度にわたくしは彼女と二人きりのおしゃべりの時間を持ち、彼の地での友情と理解を、益々深めていったのである。戦後の日本についてもスウェーデンについても、問題は問題を生み、いつもわたくしたちのおしゃべりは切りがなかった。1964年にはわたくしもスウェーデンを訪れる機会があり、その滞在中も何度も彼女に会うことができた。わたくしが彼女に最も負うところは、教え切れないほど彼女と会ったその会話のうちに、

戦中から戦後、それから今日に至るスウェーデン社会の移り変りを、自然にわたくしに伝えてくれたことである。本や資料によって知ったわたくしのスウェーデン知識を、裏書きし、補足し、説明してくれた結果となったのであるが、それは彼女の温い人柄と高い教養、識見のおかげであって、わたくしは限りない感謝と尊敬を捧げている。

わたくしが彼女と知り合ってから30年、スウェーデン社会の変化は驚くべきものである。資本主義社会のブルジュア階級の未亡人であった彼女が、民主社会主義路線による政策が進行する社会に住んで、刻一刻住みにくくなっていったことは、火を見るよりも明らかな筈であったのに、彼女は一回も愚痴らしい愚痴をいったことはなかった。「ガブリエラは気の毒に」という言葉は、周囲からわたくしの耳に入って来たのに、彼女は新しく変化する時代を理解し、その波の中で生きる道を把握し、心の安定を失わなかったことに、彼女の偉さがあったと思う。

わたくしが知った初めの頃、ガブリエラはサルシェバーデンの大邸宅に、タロー、ジロー、サブロー、シロー、ゴロー、キクコ、ヤエコの七人の子供と、何人かの召使いを使って住んでいた。広い邸内にはテニスコートもあった。そのうちに子供たちが、上から結婚したり、独立したりはじめ、日本の終戦の頃には、ガブリエラはストックホルムの中心地に近い大きなアパートに移っていた。1964年わたくしが訪れたとき、子供たちが全部巣立ったあとで、80歳に近い彼女は全くの独り暮らしとなり、高級住宅地の古い小さなアパート住いだった。昔からの立派な家具調度を三部屋に縮小し、掃除から炊事の家事一切を自分一人でやっていた。公的なホームヘルパーは、それ位元気なおばあさんは手伝わぬものだし、私的人手は皆無のスウェーデンのことである。「あのキャフェテリアは、わたくしもよくいくがおいしいですよ」と、彼女は何気なく教えてくれたが、わたくしには全くショックであった。

彼女は、自分の収入は国民年金プラスの企業年金だが、収入の80%は税金に取られるといった。でも自分はまだいいのだ。Kは大変なのだ、わたくしたちの共通の友だちKを案じていた。Kも若くて未亡人になった人だが、有名会社の株主で、その収入で子供二人を育てを上げ、中流の安定した生活をしていた人である。スウェーデンの税制に、財産税が導入されてからは、株の収入で暮らす人は、所得税のほかに株そのものに年々税がつくことになり、ひどい痛手となったのである。Kが67歳になったとき、国民年金受給の資格がついたと、手紙に托したKの喜び方は今も忘れられない。

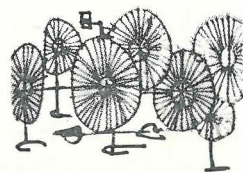
ガブリエラがまたわたくしに話してくれたのは、ガデリウス商会に勤めていた運転手夫婦の話である。彼らは今では夫婦で国民年金をもらい、新しい綺麗なアパートに住んでいるが、ストックホルム市から住宅手当をもらい、家賃は要らない。子供たちは全部独立し、夫婦二人きりの生活だが、彼らは運転手時代と大体同じ程度の生活ができ満足している。二人がもっと年寄りになって、いよいよ独立世帯が持てなくなれば、老人ホームに入れてもらえる手がある。ところが自分は今ある老人ホームには入れてもらえない。今のところはいいが、もっと年とって弱くなる時のことが不安だと言っていた。彼女はそれが心配だったので、ある時、郊外にあるキリスト教団の経営する私立ホームを見に行った。ここは私も行ったことがあるが、景勝の地にある高級老人ホームで、病院も附属しており、設備万端完備しているが、ガデリウス家といえども躊躇せざるを得ないほどの高額の費用のかかるものであった。

ガブリエラが最後に来日したのは1967年の秋で、株式会社ガデリウスの創立60周年のお祝いのためであった。夫の始めた会社が息子たちの手で益々隆盛になっているのを目の前に見て、彼女がどんなに感慨深く、このお祝いに列席したか、想像以上であったろう。この来日の折、彼女は漸く満足すべき住居が手に入ったことを、繰返し話してくれた。それはストックホルムから郊外電車で30分ほど行った終点にあるニュータウンのアパートで、サービスハウスとよばれる掃除や洗濯のサービス付のアパートであった。わたくしの友人Yがちょうどにそのニュータウンに住んでいたことがあったので、ガブリエラの新しいアパートは想像する

ことができた。新しい規格のマンモスアパートの一つだから、設備などは便利にできてはいるが、今までのガブリエラのどの住居にもあったような風格などがある筈はなく、部屋割も小さく、第一市の中心から遠すぎた。サービスハウスは普通一部屋から三部屋であるが、ガブリエラは三部屋が得られたとそれはそれはご満足で、ストックホルムに来たら必ず泊るように約束させられた。サービスハウスというのは、大食堂が附属していて一ヶ月25食分の食券を買うことが義務づけられているが、それがガブリエラには気に入らしかつた。ガブリエラは、こうして一応の安定を得たのも束の間、東京から帰って年が改まるとすぐ、そのアパートで突然に逝ってしまった。

ここでまた彼女のよく言った言葉を思い出す。「政府は今のところ、大衆の程度を持ち上げる努力をしているけれども、そのうちにあたしたちにも都合のよいようになるでしょう」。彼女亡きあと、またスウェーデンへ行つたとき、やはり彼女と共通の友だちSを訪問した。Sも郊外に邸宅を持つ未亡人だった。Sも老齢になったので、息子が老母に独り暮らしをさせておけないと、その家売って、新しく出来たばかりの老人専用のサービスハウスに移るようにアレンジしたところであった。何十年も住み慣れた家への惜別の情やる方ない彼女と、美しい環境に設備よく建った新居に納まって、満足した彼女と二回の対面はまことに印象的であった。ガブリエラの在居中には、彼女の手の届くところに、こうした心温まる老人施設はまだ出来ていなかったのだ。なるほど彼女の云った通りになったと思ったことであった。

このあと、わたくしは、サルシェバーデンの昔のガデリウス家の側を通りかかる機会があった。邸宅はそのまま「ヴィラ、ガデリウス」と名付けられて、サルシェバーデン、コミュニンのものとなり、集会所に使用しているとのことであった。テニスコートのあった場所には、公立老人ホームが建っていた。



# 来日スウェーデン留学生に聞く

Impressions of the Swedish students in Japan

Impressions as a Foreign Student in Japan

by Håkan Öhrner

Research Student, Tohoku Univ.

ホーカン・オーネル氏は東北大学に留学中で、専攻は冶金工学。

Mr. Öhrner firstly expresses the life in his laboratory of Tohoku University, particularly its familiar human relationships, and then comments the difficulty to learn other foreign languages.

I was asked with very short notice, to write something about my impressions as a foreign student in Japan. Of course you will run into many new and different things from what you are used to, if you stay in Japan for two years. However, I am afraid my impressions will not be very well organized because of the short time to write this down.

Before coming to Japan I tried to read as much as possible about Japan. It seemed clear from books and newspapers that the reasons for the campus unrest was the university system itself. The heads of the different faculties, departments and institutions would have a very dominant position, and communications between the professors and the students would be quite poor in many cases. The same problems are given quite a lot of attention in Sweden too. I had a picture of a Japanese professor as quite a dogmatic person, whom the students would hesitate to talk to, and who would not have much contact with his students except for lectures.

Now these relations probably vary a lot from one university to another and also depending on time of study, but my own experience is quite different from the picture above. The way the institutions are organized at the Departments of Metallurgical Engineering at Tohoku University, and the way the courses are made up, seem to guarantee that there is a close relationship between the professors and the students.

During the senior year the students spend quite a big part of their time in a laboratory, working on their graduation-theses. This is done in close cooperation and under guidance of the professor, other instructors, and the graduate-students. This stressing of the graduation-work probably turns the students into good experimentalists, which must be of great value after graduation, either they go on with post-graduate courses or join a company. On the other hand this system seems to make the students quite specialized in a rather narrow field.

Once a week the laboratory has a seminary, when one or two persons talk about their research work or articles related to it. During the discussion period after nobody seems to pay much attention to his prestige. At least the graduate students will sometimes oppose the professor, and it seems as anybody feeling like saying something will do so.

When you read about Japan, you get the impression, that there will always be quite



clear cut relations between different people and groups, and these relations will be formalized in different ways. You find these things in other countries too, but maybe they are easier to observe in Japan.

The laboratory where I am, includes the professor, two instructors with a doctor degree, the post-graduate students, the under-graduate students and a technician. The relations between the different members are reflected in the suffixes used when addressing each other, "sensei" "san" "kun" and "chan" respectively.

There is nothing strange in this, but in the beginning it makes quite an impression.

One of the many questions a foreigner will be asked in Japan, is if he thinks that the Japanese are diligent. Every now and then I have been trying to stay until the last one leaves the laboratory at night, but I have never succeeded. Once I stayed until past twelve o'clock at night, but then three persons slept over in the laboratory, where beds are included in the facilities. Of course this is not the rule, but especially before graduation, but also at other times, some people stay until quite late at night. However to make the picture a bit more complete I should also mention that it is not too far to a table-tennis room, and "go" is also played every now and then in the laboratory.

The close relationship which exists within an institution is not limited only to the time spent in the laboratory. The group, which consists of about twenty persons, goes on trips together, and will also go out together for some kind of amusement about once a month.

Maybe one thing I notice during the everyday activities in the laboratory, is that there is very little talking about politics. I do not know if this goes for other groups too, if it is to avoid controversial subjects, or if it is only because nobody is particularly interested.

Then I would like to turn to another field, which probably does not leave any foreign student without a lot of impressions and feelings. I am thinking about questions concerning the Japanese, English and in my case Swedish language. As a foreigner you will be taken as an American in most cases and considered a fair game for anybody, who wants to practice English. I realize fully that there are many Japanese who wants to learn English, that it is important to them for different reasons, and that they take great pain in learning the language. Anybody will admire that. The only thing is that you will run into exactly the same situation so many times, and be asked the same questions so many times, that you sometimes feel like some kind of a monster, who is expected to answer back in English when the right buttons are pushed. I think the situation will be especially frustrating if you want to learn Japanese yourself, and are putting quite a lot of efforts into that, which many foreign students in Japan are doing. To be fair I must admit that I have heard the same criticism by people with English as their native language living in Sweden and trying to learn Swedish. However, they will be spoken to in their native language, many foreigners in Japan will not.

Sometimes you will meet people who just do not seem to be willing to accept that a foreigner can speak Japanese or is trying to learn to do it.

Of course I do not mean that all Japanese should be language teachers for foreigners who wants to learn Japanese. However it should be quite easy to establish to what extent the foreigner can understand the language. If the fluency has reached a certain minimum level, it should not be too difficult to make some adjustments, and the communication ought to work. This is the way it is done using other languages, and it will work with Japanese too.

## Guest Researcher in Japan.

by Hans von Euler

Research Student, Kyoto Univ.

ハンス・フォン・オイラー氏は京都大学に留学中で、専攻は化学。

After expressing his impressions of Kyoto and the Japanese people, Mr. Euler stresses the communication difficulty with Japanese people because of language barrier.

After having spent a year as guest researcher in chemistry at Kyoto University, I have been asked to give some general views on this experience.

I dislike excessive urbanization and big cities but I have quite enjoyed being in Kyoto. Though Kyoto people are considered to have but little interest in contacts with foreigners, broadminded people can also be found. Therefore, for cultural and environmental reasons, I gladly sacrifice the more international - and more polluted - atmosphere of Tokyo or Osaka.

Living in Kyoto gives a golden opportunity to get in touch with the old Japanese culture. Its similarities and differences, as compared with the Western culture, is an interesting field of study which can contribute to international understanding. Many people put so much emphasis on the obvious differences that they forget that there are also important similarities. This makes me suspect that <sup>their</sup> impression of Western culture is too much dominated by their contact with American commercialization and marketing techniques.

Learning about Japanese conditions of living, and sharing some of them, is also an interesting experience. The hard work put up by the Japanese is impressive but not unique. Especially people with interesting and challenging duties work hard in many countries. However, the congestion during leisure time is startling. I suspect that instead of giving rest and relaxation, the free time activities can be more tiring and frustrating than just continuing to - work! To enjoy travelling in Japan, for instance, I find it necessary either to avoid days when the Japanese are on the move, or to go places which are nice although not famous.

As for professional benefit, it is natural to compare my stay in Japan with a hypothetical one in a western country with an equally high level in science and technology. Such a comparison turns out to be mostly a discussion of the language problem.

In any occidental country I could from the first day have read place names, menus, timetables, headlines, labels, &c with little difficulty. In contrast, coming to a country with a complicated way of writing, one finds oneself in the frustrating situation of being almost illiterate, needing lots of assistance with simple everyday problems. I am of course very grateful to my Japanese hosts for the time they have spent helping me with such trivialities and for their hospitality on <sup>various</sup> occasions.

Even when one has learnt enough to manage eating and everyday travelling with ease, the base for communication is rather narrow in many cases, allowing childish conversations but making ambitious discussions very difficult. This affects scientific discussions as well as more general ones. Therefore, contact is most easily established with Japanese who have improved their foreign language skill and broadened their general

outlook by being abroad some time. Some others are also interested but it takes a long time to get beyond a superficial contact level.

Many times, regardless of the language being used, the discussion with Japanese is very cautious. The mutual fear of being misunderstood or even offending the other person makes one avoid controversial topics and formulate one's opinion very politely, often omitting points of criticism. For the same reason, jokes and anecdotes are not so common in such discussions.

On the other hand, when meeting other foreigners in Japan one can discuss very frankly and to the point. In this way one can compare one's impressions and experiences with those of other people. The wide variation of such experiences illustrates the importance of one's introduction in Japan.

As scientific meetings, lectures and courses normally are in Japanese, there are vastly fewer opportunities of widening one's horizons in the scientific field, compared to what is normally the case when one visits a university in another Western country.

Thus it is likely that short-term benefit of a research fellowship can be greater and obtained more comfortably in a country in which one masters the language. Over a longer span of time, however, I think my overall benefit can be made at least as great by following up the contacts I have made and by coming back on a later occasion with a better knowledge of the Japanese language. In my opinion, one year is a too short time to give optimum scientific benefit in the case of Japan.

## スウェーデンの性教育

エリザベス・ベッタグレン夫人の講演を聞く

Sex Education in Sweden

Lecture by E. Wettergren

去る9月12日東京有楽町の朝日講堂において、財団法人日本性教育協会主催で標記の講演会が開かれ、少くとも200名をこえる聴衆に深い感銘を与えたが、聴衆の過半数が青年層あり且つ若い女性の多かったことが印象的であった。

夫人は来日以来1ヶ月余で、近々帰国されるので、いわば最後の公開講演会であったが、来日以来努力したがスウェーデンのこの面に対する日本人の誤解が十分に解消していないことを、講演の冒頭に述べ遺言の意を表していた。

正確を期し得ないと思われ多分の躊躇を感ずるが印象に残った点を述べると、まず夫人はスウェーデンの性教育が如何なる方法で行われているか、その現状を述べられたが、所謂幼年期から思春期にかけて、何んくぎりかの年齢別にそれぞれに適合した性知識を、必ずしも特別の科目教課の形を

とらず、弾力的なスケジュールと極めて自然的なチャンスをとらえて教室等において行われている。

しかもその内容は、他の生物の実態から理解させる方法を取り、次第に人体の実態から性そのものの在り方に及び、極めて明解且つ具体的なものであって、避妊の方法にも及び器具の種類、入手方法および値段まで説明されている模様である。

また男女の交際については、愛情を基本とした自由と責任の併存を強調し、この理解のもとで婚前交渉も肯定されることと述べられた。

夫人の云われる誤解の原因については、少くとも家族制度、宗教その他国情や国民性の相違を十分踏まえたうえ理解するの必要を痛感するが、その教育の自然的、弾力的且つ具体的な手法は、我が国の当面問題の貴重な参考資料たるを失わないと思う。

(R・H)

## スウェーデンの環境保護に支出する費用、急増す

Sweden Expenditures for Environmental Protection Sharply Increasing This Year.

ビジネス週刊誌ベカンス・アフエレル(Vechans Affärer)の推計によると、スウェーデンはこの1972年においてすでに環境保護および汚染防止のために、総額12億クローナ(768億円)の支出をした。

この種の支出は70年代前半には毎年10億クローナ(640億円)程度が必要であろうと予測されていたが、本年はこれを上回る額がすでに6カ月で使用されていることを同誌は指摘している。なお最近この種の支出額は毎年2億クローナ(128億円)程度であった。

上記の12億クローナ(768億円)のうち、約6億4,000万クローナ(412億1,600万円)は産業界が、残りのほとんどが地方自治体が支出した。これらに対し国は産業界に3億9,500万クローナ(252億8,000万円)、自治体には3億5,000万クローナ(224億円)の支出を認可している。

このように環境問題についてのスウェーデンの支出は急増しているが、それが貿易収支へ及ぼす影響は、こうした産業界の支出の8割強がスウェーデン国内の企業に向けられているので、ほとんどないと同誌はつづけている。

環境問題についての支出はいまだに污水处理に関係したものが主であるが、この傾向は1970年代半ばには逆転し、大気汚染問題が次第に強調されるものとみられている。

## EEC諸国との貿易協定。スウェーデンと西ヨーロッパ諸国との関係の安定化と持続性との貢献

EEC Agreement Gives Stability and Durability to Sweden's Relations With Western Europe

現在まさに誕生しようとしている拡大ヨーロ

パ共同市場(Enlarged West European Market)は、スウェーデンも参画してきた貿易政策分野の最も包括的な経済協定に基づいているものであると、スウェーデンの通商担当大臣ケル・オーロフ・フェルト氏(Minister of Commerce Kjell-Olof Feldt)は最近公表した。EEC諸国との自由貿易協定は、この7月22日ブリュッセルにおいて、外務大臣クリスター・ウィックマン氏(Foreign Minister Krister Wickman)によって調印された。

フェルト氏は、「西欧諸国における自由貿易実現はスウェーデンの貿易政策の主要目標である」と述べ、さらに、「この5年以内に、この協定に基づいて、16カ国3億の人口を包む工業製品の無関税市場が出現するであろう」と指摘している。さらにまた、この協定が成立したことによって、スウェーデンと西欧諸国との関係は安定性と持続性を増し、種々の生産や計画の基礎をしっかりと固めることができる、と同氏は指摘している。

同時にまた、この交渉においては、なんらかのはっきりした成果をあげるために幾分の妥協がなされたことも注意すべきである。製紙および製鉄の分野で、スウェーデンの要求が受け入れられるには相当の期間が必要であるという条件を呑まざるを得なかった。

## 中国がスウェーデンに対し水力発電装置を発注

China Orders Hydro-Power Equipment to Sweden

スウェーデンのカーlustッド・メカニスカ・ベルクスタッド社(Karlstads Mekaniska Werkstad)が報ずるところによると、最近同社はASEA社と協力して、中国政府から水力発電所用の装置一式を三組、総額3000万クローナ(約19億2千万円)に達する注文を受注した。

Kaplan型で18メートルの落差でそれぞれ37MWの発電を持つタービンは同社が製造し、ASEA社は発電機と附属装置一式を納入する。引渡しは、1973年6月に始まり、1974年前半には終了の予定である。